

「2023年度タイ・チューラーロンコーン大学サマースクール派遣参加報告書」

京都大学文学部3年 佐藤 明日華

まず、学習成果の点について、私は、自身が所属する、スラブ文学専修に関連する地域に留学したい気持ちが、とても強まりました。

タイの文化は、日本と似ていることが多くて、強く違う国に居るんだな、と思うことはありませんでした。ですが、それでも、異なる常識や風土が存在しており、それらに直接触れなければ、文学作品の中に存在する、暗黙の了解や、気風に触れ、より深くその作品を理解することが、とてつもなく難しいことなのだろうと思ったからです。

実際、私は、派遣によって、留学直前に視聴したタイのドラマの読解を深めることができました。そのドラマでは、主人公の青年が、父親に逆って、家出するシーンがあったのですが、派遣前の私は、小さな反抗として捉えていました。ですが、タイで、タイ人は家族を一番大事にする、という話を聞いて、その家出は私が思っていた以上に、主人公にとって重大な決断だったことを理解しました。このような自覚していない不理解が、たくさんあることを、今回の派遣で知ったため、実際にスラブ語圏に訪れたい気持ちが高まりました。

次に、海外の経験について、私は言語の重要性と同時に、言葉が伝わらなくても、意思を伝えようとする工夫や気力の大事さを学びました。

派遣序盤、私はほとんどタイ語がわからず、食堂などでは全て指さしで注文していました。また、コンビニなどでも、グーグル翻訳を使うことで、食糧を購入していました。

そこから、信頼できる拠点があり、お金さえあって、ある程度平和な地域なら、ただ生活することだけなら可能だということがわかりました。

一方、自分の内面を伝え、相手の内面を伝えるためには、言語の深い理解が必要だということも、私は痛感しました。また、少しでも言葉を使えるだけで、相手からの印象が、よくなることも感じました。そのため、価格交渉に必要な単語や、ものの名前を聞くための単語は、どこに行くときでも覚えておくべきだなと思いました。

プログラム内容について感じたのは、現地で言語を勉強する意義です。言語学習は復習が肝要であるということ、改めて感じると同時に、何より学んだ言葉を実際に使い、その言葉が相手に影響を及ぼす様を見ることは、非常に言語学習に影響するなと思いました。言葉が暗記科目ではなく、コミュニケーションという行動の手段であることを、強く自覚しました。

また、進路について、外国に行ったとき、現地の人間の助けがあることがいかに大きなことかを感じました。そのため、自分も助けになるような何かをできたらな、と思いました。